

社会性をはぐくむへき地・小規模校の 学級経営の基本的観点と課題

玉井 康之

(北海道教育大学 大学院教育学研究科 高度教職実践専攻)

Class Management of Rural Small School and Basic Strategy for Social Skill

Yasuyuki TAMAI

はじめに

近年の子ども全体の課題として、社会性の育成・人間関係づくりが大きな課題となっている。これはへき地・小規模校の課題というよりは、コンピュータゲームによる遊びの増大・自然体験活動の減少・家庭生活の変化等の影響による遊び集団や活動の減少等に起因するもので、すべての子どもたちの共通の課題であると言えよう。

その中で、へき地・小規模校に対しては、少人数の固定された子どもの中にいるために、多様な人間関係を広げることができず、社会性が育たないのではないかと懸念が、教師の中にも少なくない。しかし、それは、そもそもへき地・小規模校での学級の人間関係をすべてマイナスと捉えるのか、少人数の条件を活かしてプラスの活動ができると考えるのか、教師の社会性をとらえる考え方によって左右されるものである。

へき地・小規模校は、人数の多少はあるが全体的に極小規模であり、一般的に少人数であるというよりもっと少ない極少人数であることを前提にしている。これらはマイナス条件であると認識される場合が少なくないが、少人数の特性を把握しそれをプラス面として日常的な学級経営の中で、少人数を活かす方法を考えていかなければならない。すなわちへき地・小規模校の教師が意識的に少人数の条件をメリットとして活かしていけば、単になれ合い的な関係や、TPOをわきまえない関係になることも避けることができる。逆に言えば、へき地小規模校で社会性が育たないのは、教師が何も施さなくても、都市的な社会関係を自然発生的に培うことができることを期待していることの結果でもある。

本稿では、へき地・小規模校の子どもたちの社会性が育っていないという言説が流布される中で、へき地・小

規模校の教師が留意すべき学級経営の基本的観点と方向性をとらえることを課題としている。それによって、へき地・小規模校の子どもたちの社会性が育たないという言説を乗り越え、へき地・小規模校における社会性の育成を高めていくことを展望するものである。本稿では、一つ一つの学級経営の実践方法を抽出するというよりは、トータルな学級経営の観点と方向性を明らかにすることに限定してとらえるものである。

1. へき地・小規模校の学級経営をとらえるパラダイムの転換と基本構成要素

最初にへき地・小規模校の学級経営は、小規模性をマイナス面にとらえるのではなく、それをメリットとしてとらえるパラダイムの転換と、さらに新しい活動を行う条件づくりと施策を創りだしていくという意識転換が不可欠である。

これまでへき地・小規模校というと、社会性・集団性や表現力が育たないのではないかとというマイナスのイメージが伴ってきた。その背景は大規模校の学級のあり方を絶対視して、大規模校と同じような指導方法で小規模校の学級を運営している場合によることが少なくない。またへき地・小規模校では、子どもと教師、子どもどうしの関係において信頼関係が創りやすいために、問題行動も少ないので、意識的に学級経営を施さなくても運営できるという側面も背景にある。

確かに、小規模校の良さを活かさずに、自然発生的な成り行きで学級運営を行っていけば、なれ合い的な関係の中でフォーマルな関係を作り得なかったり、また人間関係のもつれを調整する経験をあまり持たなくなるというマイナスになる面も現れてくる。

一方小規模性を逆手にとり、小規模性の良さを活かして、地域と子どもの関係の構築や発表機会の多様化を促進していけば、社会性を伸ばすこともできる。少人数だから学級経営ができないのではなく、少人数だからできる学級経営の積極面を伸ばしていくという発想が、へき地・小規模校の学級経営を発展させる上で不可欠である。

またへき地・小規模校では、学級担任を超えて、全教員が全子どもの様子を多面的にとらえている場合が多い。そのため、学級担任が気づかないような、個々の子どもの様子を伝え合ったり、学級担任以外の教師が直接子どもたちに指導することができる。それによって、学級が個々ばらばらに展開するのではなく、学級単位を超えて学校全体で学級運営を進めることができる。すなわち学級経営も学校全体の教師の協働性で成り立っている。この教職員の集団的な関係の中で展開する学級経営は、どこの学校に行ってもこれから求められる基本的な学級経営の観点である。

このようにへき地・小規模校の学級経営の場合は、これまで無意識にとらえてきた大規模校の指導のあり方を絶対化した評価基準で小規模校をとらえるのではなく、小規模の特性をプラスと見なすパラダイムの転換が不可欠である。そしてプラス面を活かす学級経営の条件づくりと方法を模索していく意識の転換と姿勢が求められる。

このような基本的なパラダイムの転換の姿勢を踏まえた上で、へき地・小規模校の学校・学級の特性を活かしていくことが求められる。へき地・小規模校の学級経営の基本的な方向性としては、以下の点が課題となる。

第一に、最小学年以外は必ず上級生と下級生が存在しており、どの学年の学級においても、少人数の縦割り班を活かして、異年齢集団の指導力や社会性を高めることが重要である。

第二に、少人数の学級経営では、子どもに明確な役割分担と責任を持たせて、社会的責任感や指導力を高めていくことが重要である。

第三に、小規模校では、以心伝心の人間関係の良いところを伸ばしながらも、子どもの発表・発言の機会を多くして、フォーマルな場でのコミュニケーション能力を高めることが重要である。

第四に、小規模校では、地域の自然・環境・人材を活かしやすいため、学校の中での学級経営というよりは、体験活動や地域行事など、地域との関係を活かした学級経営を意識的に進めることが重要である。

第五に、地域住民が協力的で日常的に接する機会が多いことを活かして、地域の大人と子どものフォーマルな会話・子どもから地域住民への依頼等を進めていくこと

が重要である。

以上の五つの基本的な観点と方向性をそれぞれ以下にとらえていきたい。

2. 少人数縦割りの人間関係を活かした学級経営と社会性の育成

異年齢の集団は、基本的に能力差のある集団であり、このような中で異なる能力を前提にした人間関係を意識的に創っていけば、同年齢・同能力の関係とは別の社会性を培うことができる。都市部の大規模校では、同学年の子ども数が多いために、同学年の子どもどうしでつきあう場合が多いが、逆に異年齢・異世代の人と話しをする機会がほとんどなく、異年齢・異世代の子どもとの会話やつきあい方が苦手であるという指摘もある。学校以外でも地域の遊び集団や子ども会の日常的な活動がほとんどないために、異学年の子どもと気を許して話をする機会がない。

同年齢の子どもどうしがつながることは、同能力の子どもどうしの付き合いを前提にしているために、基本的には似た者どうしがつながるという発想を、子どもたちも無意識のうちに前提にしている。また同年齢の子どもどうしの付き合いは、同質性が強くなれば、逆に異質性に対して排他的になってしまい、誰でも受け入れるという雰囲気は徐々に消えていく傾向が出てくる。大人数集団の中で小グループができて、そのグループ以外の人との付き合いが減少してしまうのは、この同質性を追求することが強くなっていることが背景にある。すなわち同質性の追求は、排他性を伴う可能性を持っているということである。

へき地・小規模校では、学級の人数が少ないために、同学年の集団性だけでなく、異学年の関係も必然的に強くなる。少人数の異年齢集団にも常に先輩と後輩がいる。先輩も後輩も仲が良いという関係もあるが、上級生と下級生の間で対応方法を変えながら、人間関係を使いわけていくという側面も生じてくる。この異年齢の集団は、本来できることが異なる能力差のある集団であり、本来的にはこの能力差が人間間にあることを前提にしなければならない。逆に同学年であるというだけで、異なる能力の可能性があるにもかかわらず、同等の能力であるように意識してしまうと、個性や個人差を認めることができなくなってしまう。

少人数の学級では、意識的に縦割りの関係を作っていくことで、社会の中でのひとつの訓練としての異年齢・異世代の人間関係を作る力をつけることができる。その場合に、上級生は、下級生の模範役を担うとともに、下級生間の人間関係のもつれなどの調整役として意識させ

ることが重要である。教師が上級学年をして、自らをリーダーとして意識させることで、下級生を指導したり、調整役となったりすることができるようになる。この縦割りの中での指導的立場・調整者としての立場が、子どもを上級学年として意識的に発達させる条件となる。逆に異年齢の子どもを能力別だけで同等に処遇することは、上級生としての社会的発達をそぐことになりかねない。

縦割りの関係づくりでは、例えば、意識的に異学年の班を作って、学校内での行事・作業等の共同活動や、地域と連携した奉仕活動・公共活動などの体験的活動や、校内の児童会・委員会等の子ども主体の機能集団・目的集団を運営することなどである。

複式の学級活動においても、上級学年と下級学年を同じ学級構成員の立場として処遇するだけでなく、上級生と下級生の役割分担をして、最後の点検や監督を上級生に責任を持たせるなどである。休み時間・放課後の遊びにおいても、日常的な関係においても、常に上級生に対しては、下級生に教えてあげたり、意見を調整してあげたりすることを心がけさせることが重要である。このように上級生が下級生に教えたりとりまとめをするなど、上級生にリーダーとして引率の責任を持たせることによって、社会性やリーダーシップを身につけることができる。たとえ上級生の方がリーダーとしての性質を持ち得ていない場合でも、そのような役割を与えていくことが重要である。

一方下級生にとっては、身近な上級生の姿を見ることによって、目指すべき社会的な力や生き方などの目標を明確にすることができる。教師や大人等の年齢の離れた人よりも、身近な先輩の方が目標像を持ちやすく、下級生も早くその目標像に近づこうとする。その場合に上級生のどこが自分より優れているかを探す習慣をつけ、常にそれを乗り越えてがんばるように促すことである。見よう見まねの模倣学習だけでなく、上級生を尊敬しながらもいい意味で意識的に乗り越えようとすることによって、上級生と下級生の建設的な緊張感を高めていくことができる。

3. 少人数学級における子ども相互の役割分担・責任を明確にした学級経営と社会性の育成

一般的に人間関係は、接触頻度が高くなる少人数間の方が作りやすい。へき地・小規模学校では、学級自体が少人数のため、役割を明確にしなくても学級はまとまりやすい。また大人数の学級では、一人一人に細かく目が行き届かないために、子どもの集団に任さなければならなくなるが、逆に少人数だとある程度教師の指示が直接入りやすい。へき地・小規模校では、あらゆるところで

教師の目が行き届くために、逆に教師が学級運営や学習活動や生活指導などに目配せする中で、無意識のうちに教師主導で学級が運営されやすくなる。

しかし子どもたちの役割や責任力を高めるためには、学級の人数が少ない中でも、子どもの役割を明確に持たせて、自主的に運営を進めさせる必要がある。学級の中での校内委員会や学級内担当者を多様に配置し、それぞれの学級内の委員会の話し合いを元にして、学級運営を行ったり、回りの人への呼びかけを促すことが重要である。教師が直接指示しやすい状況でも、あえて、子どもの運営と決定のプロセスを経ることが重要である。

係活動の種類と活動内容は、子ども自身に検討・提案してもらおうことがもっとも重要であるが、そのために学校での子どもの1日の生活サイクルと担うべき活動をすべて抽出し、それらを点検・推進する役割として係を創設していく必要がある。例えば、朝は、挨拶から始まり、朝の会を行うのであれば、挨拶係・朝の会提案係、などを作っていけば良い。これらの係は学校・学級内の機能集団として展開することを目指すものであるために、係活動がそれぞれ独立してしまうことを目指すものではない。そのため、委員会の種類はまとめて大きく総括した委員会にすることもあり得るが、その場合には、委員会内の各活動内容と責任を具体的に明文化して、委員会として何をするかが共通の理解になるようにしておくことが重要である。

子ども達の学級運営活動に対しては、「自分たちで運営することが大事だ」という理念を常に伝えていく。そして役割分担できる係と活動内容を、最初に教師がアドバイスして設定しておくことも求められる。活動内容やその進め方をアドバイスしておく、具体的な活動が進むと共に、子ども達は自分たちで担っているという達成感を高めることができる。自主的な役割は子ども達に任せただけで展開するものではなく、様々な活動促進アドバイスを受ける中ではじめて主体的な活動が展開していく。

学級運営を自立的に展開するためには、特別活動などの時間を利用して、学級行事や学級活動を学級委員等に提示してもらいながら、学級・学校全体を対象にした活動を自分たちで企画させることも必要である。

このように、それぞれの学級系の役割と責任を明確にし、さらに学級運営を自主的に運営できるように、子どもに提案させていくことによって、小規模であっても、フォーマルな出番と役割が多くなり、社会的な役割と責任感を高めていくことができる。

4. 少人数間の発言・発表機会を活かした学級経営と社会性の育成

(1) 大人数と少人数のコミュニケーションタイプと機会の相違

直接コミュニケーションの力は、基礎的な語彙習得を基盤にして、実際に話す機会・聞く機会を増やすことで、コミュニケーション力が鍛えられていく。コミュニケーションの機会を作る条件は、大人数集団と少人数集団では、それぞれ子どものタイプによって、コミュニケーションの機会は変化してくる。

大人数集団の子どもの中では、人間関係が疎遠になるので、コミュニケーション機会が必ずしも高まるわけではない。大人数集団では他人に無関心になる傾向も強くなるため、コミュニケーションを自ら切り開くことが苦手な子どもにとっては、大人数の中で孤立した関係で過ごすことも少なくない。そのためあえてコミュニケーションを取らなくても、困ることはない。一方、自らコミュニケーション機会を切り開いていく子どもにとっては多様なコミュニケーション機会を経ることができると、コミュニケーション力を高めることができる。

少人数間の子どもの関係では、意思疎通もやりやすいため、コミュニケーションの条件となる強い信頼関係は保つことができる。逆に意思疎通を経なくても以心伝心でわかり合い、直接言葉に表さなくても済まされてしまう。したがって、意識的に表現させる機会を作るようにしなければ、コミュニケーション機会が減ってしまう可能性も懸念される。

(2) 少人数間の発言・発表機会の設定と社会性の育成

そのため少人数であっても、フォーマルな場面で発言・発表の機会を多く設定することが重要になる。発言・発表の機会を持つことによって、時と場をわきまえた話し方や馴れ合いではない関係の使い分けをすることができ、結果としてコミュニケーション力を高めることができる。

例えば、朝の会・帰りの会では、係の者が学級・学校の構成員全員に呼びかけたり報告したりする機会を毎日設けることが重要になる。また学級の係としてみんなに呼びかけるときには、壇上に立って発言するなど、形式的にも発表・発言の仕方を異なる状況に設定しておくことが重要である。また学習発表会も、少人数であっても、フォーマルな形で学級・学校内で設定することも必要である。

学習発表会では、授業参観日を拡大した形で、保護者・地域住民に来て頂いて、適度な緊張感を持たせることも必要である。時には、場所を変えて、公民館などで発表

しても良い。場所を変えるだけでも普段と異なる緊張感やフォーマルな雰囲気を作ることができる。さらに、発表内容によっては、聞いてもらいたい人を限定しながらその施設や場所に出かけたり、保護者・地域住民一般に公開する場合もある。このような学校の中だけでの発表とは異なる場面で、地域と連携して発表する機会を持つことも重要である。

そもそもへき地・小規模校では、学級人数が少ないために、何をやる場合にも、役割や発言する機会を多く持たせることが可能である。授業でも行事でも、日常的に発言・発表させる機会を意識的に多く持たせることによって、コミュニケーションの機会を多くすることができ、意思疎通とコミュニケーション力を高めることができる。このように全員に発言させることが時間的にも可能であるへき地・小規模校ならば、毎日でも意識的に個々の子どもが発言・発表・説明できる時間を設定し、意識的に言語化することが重要である。話す機会を多く持つことで、へき地・小規模校の子どもでも、社会性とコミュニケーション力を高めることができる。

5. 地域の調べ活動・体験活動・行事を活かした地域活動および発表会と社会性の育成

調べ学習は、知識自体を静的に覚えていくものではなく、対象に対して動的に調べていくものである。そのため調べ活動自体が、行動力や社会的関係を含み、また現実と教科書の一般理念を結ぶ応用的な思考を伴うものである。そのため、調べ学習を展開すれば、社会的・行動的な活動を通じて社会性を育成することができる。学校の中では、受動的な活動や子どもどうしの関係が多いが、学校から出ることによって、社会的活動や社会的関係づくりを広げることができる。

全体的にへき地・小規模校が立地している地域の多くは農漁村であるため、自然環境に恵まれている。しかし恵まれた自然環境も当たり前の環境だと思って、逆に教師は、調べ学習活動の対象や教材としては、取り上げない傾向にある。またへき地・小規模校には博物館・図書館がないので、調べ学習ができないと考えている教師も少なくない。しかし必ずしも、見える世界の自然環境に慣れているということと、その自然環境の知見を深めてそれを熟知することは同じではない。

この自然環境や農漁業を活かして、自然体験学習・農漁業体験学習とその調べ学習を行うこともできる。調べ学習では、まず自然体験活動は、環境教育の一環にもなるし、食育にもなるし、生命との関係では心の教育にも位置づけることができる。また地域の自然の科学的な特徴・役割や、歴史・木材産業等との結びつきなどを調べ

る活動を併行して展開することによって、知らなかった地域の良さと奥深さを全体的にとらえることができる。

体験学習を学級経営にも位置づけて、学級の子どものうしの企画づくり・役割分担・共同作業等を取り入れていけば、子ども間の協働性やアイデンティティを高めることができる。これによって、社会的役割分担や協同活動とそれをコーディネートするという社会性を身につけることができる。これらの体験活動の企画・準備活動は、へき地・小規模校の方が直接体験を教育課程の中に取り入れやすいメリットがあるため、意識的に教育課程に組み込んでいくことが重要である。

また体験学習の技能や調べ学習は、専門的な技能・知識が必要になるが、小規模校では、地域住民も学校に対して協力的で、地域の職業専門家と連携しながら、取り組みを進めていくことができる。教師があらゆる活動を指導するよりは、様々な地域住民が子どもに直接関わり、その分野の専門的な技能・知識を活かす方が教育効果も高い。調べ学習は、個々の農漁家や職業人に経験的な聞き取りをしながら、その個別的な経験を集めて、そこから普遍的な内容を見いだすだけでも、応用的な認識を培うことができる。

このようなへき地・小規模校を取り巻く地域の自然・環境・人材を、学習活動に活かした調べ学習の方法を教師が身につけ、それを子ども達に展開することで、子どもの社会性を育成することができる。このような活動は、総合的な学習の時間だけに限定してできるものではなく、学級経営全体を通じて展開するものであり、総合的な学習の時間を日常的な地域との関係に結びつけていくことが可能となるのも、へき地・小規模校のメリットである。

6. 地域の大人とのコミュニケーションと社会性の育成

地域に出て行く調べ活動は、自分で地域住民にアポイントを取って、実際に聞き取りに行くという活動を伴っている。その場合には、フォーマルな依頼と、敬語などを使ったマナーが不可欠である。現代の子ども達は、大規模の学校においても、このような地域の大人と会話するような機会をあまり持ち得ていない。そのため、大人数の学校でも、子どもは大人と話しをしたり、敬語を使い分けたりすることができない場合が多い。

このような大人とのフォーマルな会話や敬語の使い分けは、実際に使ってみて使えるようになっていくものである。へき地・小規模校の場合は、ある程度子どもが失敗しても、受けとめてもらえる雰囲気があり、地域住民も子ども達の活動に協力的である。そのため、へき地・

小規模校において子ども達が地域住民と交流したり、依頼・聞き取り調査等のフォーマルな会話ができる機会を多く設定することが、へき地・小規模校の子どもの社会性を育成することになる。へき地・小規模校の地域に対しては、このような「フォーマルな大人とのコミュニケーション機会を設けて、子どもの社会性を育成したい」という目的を伝えておけば、このような活動に協力してもらえる地域的条件がある。

またボランティア活動・地域奉仕活動や地域行事への参加・運営等に関わることなどを奨励しながら、社会的な活動の中で子どもの社会性を育てていくことは重要になる。地域の行事等は、地域が進めているので、学校が直接関わらない場合も多いが、学校がそれらを教育課程の中に位置づけて行くことも必要である。

フォーマルな会話を使えるようにするためには、学校行事・地域行事の時や、調査活動で使える挨拶・表現などをある程度教えていくことも重要である。日頃からの地域住民との挨拶・交流を意識的に心がけていくことも伝えていく必要がある。これによって、時（Time）・場所（Place）・場合（Occasion）のTPOを使いこなせるようになっていく。これはTPOを活かしたソーシャルスキルトレーニングである。

おわりに

以上本稿では、へき地・小規模校が少人数であるがゆえに、社会性の育成ができないのではないかという言説に対して、少人数であっても、社会性を育成していく学級経営の方向性を観点としてとらえることを目的とした。大人数集団と少人数の関係では、子どものタイプによって、社会性を発揮する条件が異なる。積極的に他の人と関わることができるタイプでは、大人数の方が社会性を広げる機会が広がるが、あまり積極的に関われない子どもの場合は、逆に大人数の方が他人に無関心になり、人間関係を作ることができにくくなる。このように社会性を広げる規模と段階は、子どもの性格によっても異なってくる。

その上で、少人数であるがために、社会性を育成できない場合があるとしたら、教師が大人数集団の時と同じように対応して、自然発生的に社会的関係ができるのを期待していることが、社会性育成の限界につながっている。社会性の育成は、都市部でもへき地でも、現代の子どもは意識的に社会的関係づくりの働きかけをしなければ、社会性が育つものではない。したがって、へき地・小規模校の場合は、少人数であることを意識して、学級経営の方法と働きかけを心がける必要がある。へき地・小規模校では、マイナス面とを感じる部分を悲観するので

はなく、それをプラス面の条件として伸ばしていく意識のパラダイム転換が前提として不可欠である。

へき地・小規模校の子どもをとりまく人間関係の特徴では、第一に、少人数であるがゆえに異年齢の縦割り集団をつくりやすいこと、第二に、少人数のため全員参加の役割分担を与えやすいこと、第三に、少人数のために、全員に発言・発表する機会をつくりやすいこと、第四に、少人数であるために、調べ活動・体験活動を行いやすいこと、第五に、地域の大人とのコミュニケーション機会をつくりやすいこと、がへき地・小規模校の特徴である。したがって、へき地・小規模校では、都市部の大規模校でできたことができないと考えるよりも、これらのへき地・小規模校の特性を活かして社会性を高めていかなければならない。

第一の異年齢集団づくりでは、少人数であっても、意識的に縦割り集団を組織し、上級生が下級生を引っ張っていくという経験を学級の中に作っていくことが重要であることを指摘した。人を引っ張っていくような性格でない場合でも、そういう経験を徐々に積んでいくことも重要であることを指摘した。また異年齢集団は、能力差を前提にした関係であるがゆえに、多様な個性を調整する社会的関係を含んでおり、それを意識的に発揮させることが社会性を培う上で重要であることを指摘した。

第二の役割分担付与では、学級・学校の役割を全員が受け持ち、その責任を遂行するフォーマルな機会を、朝の会や学級会等で与えることが重要であることを指摘した。教師が直接指示できることでも、学級・学校の自らの役割を全員に向けて投げかけさせていくなどである。数人以下の少人数であっても、壇上でしゃべるなどの雰囲気や話し方を変えて提案してもらえば、社会的役割と責任感を強めていくことができることを指摘した。

第三の発言・発表する機会の多様な保障では、少人数であるがゆえに、全員が均等に多く発言できる時間的余裕がある。そのため、発言・発表する機会を意識的に設定することの重要性を指摘した。授業時の発言・発表だけでなく、学級会・行事等の特別活動・学習発表会・朝の会帰りの会、などのあらゆる場所で発言・発表の機会を均等に作っていくことが、社会性を培う上で重要であることを指摘した。

第四の調べ活動・体験活動の設定では、それ自体が企画・運営・調査活動を伴うものであり、地域に出て行くなどの社会的関係を作っていくもので、この調べ活動・体験活動を意識的に進めていくことが社会性を培う上で重要であることを指摘した。

第五の大人とのコミュニケーション機会の設定では、大人への依頼活動や大人とのフォーマルな会話は、TPO を使いこなす社会性を育成する上で重要であるこ

とを指摘した。へき地・小規模校では失敗しても地域住民から受けとめてもらえる関係が存在しているので、地域にも協力を依頼しながら、調べ学習や行事などでも、地域住民とのコミュニケーションを取る機会を積極的に作っていくことが、社会性を培う上で重要であることを指摘した。

以上のようなへき地・小規模校の人間関係の特性を逆手にとって、それをプラス面として活かすような学級経営を進めていけば、少人数であっても、子どもの社会性を育成することは可能である。へき地・小規模校であると、社会性が育たないという言説は、都市部大規模校と同じように何も子ども達に施さないで自然発生的な成長を期待していることの裏返しである。すなわち、都市部大規模校のところで自然発生的に培われるような環境と教育力を期待するのではなく、へき地・小規模校の利点を活かして、少人数であるからこそできる学級経営活動を施していくことが重要である。それによって、へき地・小規模校であっても、社会性を十分育成することができると言える。

参考文献

- 木岡一明編著『学年・学級の指導点検とカリキュラム開発』教育開発研究所，2004年
 津村俊充編著『子どもの対人関係能力を育てる』教育開発研究所，2002年
 行動科学実践研究会編『Creative Human Relationship』プレスタイム，1996年